

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：大原宣久

『交流のための自伝』と題された大原宣久氏の学位請求論文は、その副題「ミシェル・レリス『ゲームの規則』読解」が示すとおり、フランスの作家ミシェル・レリス(1901~1990)が遺した『ゲームの規則』の精密な読解の試みである。

『ゲームの規則』は『ビフェール』(1948)、『フルビ』(1955)、『フィブリュ』(1966)、『フレール・ブリュイ』(1976)の全四巻からなる。完成まで三十年近くを要した、文字通り畢生の大作だが、その長大さのみならず、途切れなく続く文体や、言葉遊び、地口を発想の核心に秘めた特異な書法ゆえに、難解作として読者の前に聳え立ってきた。文学史上の重要性はつとに認められながら、本格的な研究はフランスでもようやく端緒についたところであり、日本では『ビフェール』が邦訳されている程度で、全容はまったく知られていない。

大原氏の論文はそうした空白を埋めるべく、大作に正面から取り組み、テキストに即し慎重かつ着実な解説作業を貫徹して、そこに浮上する重大なテーマを捕捉、分析する。

論文の構成は、全四部からなり、「自伝的探求の始まり」と題する序、および「おわりに」と題された結語が付されている。序においては、『ゲームの規則』以前の作家の歩みが素描され、シュルレアリスム運動に加わるかたわら、言語学者としてアフリカに旅し、異文化と親しく交流したレリスが、徐々に「私」を主題に据えた作品の執筆に向かっていくさまが辿られる。

すなわち第一巻『ビフェール』においては、幼児期の言い間違いの記憶を掘り起こし、未だ社会化されない言葉をなまなましく現前させようとするレリスの姿勢が、日常を揺るがす「聖なる」体験への希求と結びつくことが指摘される。その希求を、大原氏は過去と現在、文学と現実の隔壁を超えた「交流」の願望として捉える。とりわけ重要な「交流」の契機を、大原氏は第二巻『フルビ』に潜む「死」の主題のうちに見出す。生の彼岸に架橋したいという抑えがたい欲求のうちに、レリス作品の根底的なあり様が認められる。テキストは外部、他者へと開かれ、読者との交流を求めて書かれる独特な自伝となるのだ。

作家は第二巻刊行後に自殺を企て、文字どおり生死の境をさまよう。大原氏によれば、その経験が書き込まれた第三巻『フィブリュ』において、それまでの試みに対する一つの結論がもたらされる。散文による現実把握の限界を意識したレリスは、自らの望む「死と生を結びつける」如き「全体的」な作品は、詩によってこそ可能となるというヴィジョンを得た。

最終巻『フレール・ブリュイ』の、散文でも詩でもあるような断章形式はそうした認識に由来する。しかも断章形式は、それがはらむ空隙ゆえにひととき読者の参加を促し、作家の夢見る「友愛の共同体」への誘いとなりうる。そこに大原氏は全四巻の到達点を見るのである。

「交流」や「自伝」といった鍵となる概念の定義づけに、曖昧さや踏み込み不足が感じられる面があり、またゲームの「規則」を実体的な目標として考えすぎているきらいもある。原文の理解が十分でないまま、自らの論旨に引きつけて解釈した結果、いささか牽強付会な展開を示している部分も指摘された。しかしながら、難解な大作の全体をよく咀嚼した上で、平明な日本語で論じ切ったことは高い評価に値する。従来見過ごされがちな、作品の歴史的背景に関する考察がなされている点でも、オリジナリティを主張しうる。日本におけるレリス研究の新たな地平を切り開く、重要な成果とみなせるであろう。

従って、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。